アンケート調査からみたメニエール病の経過

水田 啓介・久世 文也・早川 和喜
山田 剛寛・青木 光広・宮田 英雄

The Course of Meniere's Disease

Keisuke Mizuta, Bunya Kuze, Kazuki Hayakawa
Takahiro Yamada, Mitsuhiro Aoki, Hideo Miyata

Department of Otorhinolaryngology, Gifu University School of Medicine

We investigated the course of Meniere's disease by questionnaires sent to 94 patients in June 1992. Sixty-seven of them sent back information as to whether they still had attacks of vertigo and whether they had been treated since they visited our clinic between 1981 and 1986.

On the basis of their responses, they were divided into 2 groups: those who had not been treated or had been treated only when they had attacks of vertigo (natural course group) and those who had been treated for a certain period (treated group).

We judged that they were cured of vertigo if the period without attacks was over 2 years and longer than their maximum attack-free intervals. The percentage of cures was similar in the 2 groups, but the time between the first and the last attack of vertigo was longer in the natural course group than in the treated group.

Key words: Meniere's disease, natural course, questionnaire

I. はじめに

メニエール病の自然経過を検討しておくことは、その症例個々の治療効果や予後を考えるうえで必要と思われる。しかし、全く治療を受けていない症例を多数集め検討することは難しい。今回、我々は過去に当科を受診したメニエール病患者にアンケート調査を行い、その治療状況から自然経過に近い群と一定期間治療を受けている群に分け、この2群を比較検討することにより、メニエール病の自然経過に近いと思われる経過を検討した。

II. 対象と方法

対象は昭和56年1月から61年12月までの6年間に岐阜大学耳鼻咽喉科を受診したメニエール病確実例94例である。メニエール病の診断は時田¹⁾らの診断基準に従った。94例に対して、表1のような内容のアンケート調査を行い、同時に電話でも調査した。ただし、めまい発作とは自発性のめまいで、数10分以上続くめまいに限った。アンケートないし電話で当科最終受診後の治療状況、経過が明らかとなったのは67例である。性別は男40例、女27例であった。罹病耳は一側性が63例(右耳:29例、左耳:34例)、両側性は4例であった。この67例の初診から調査を行った平成4年6月現在までの期間は、5年7カ月から12年8カ月

表1 アンケート調査内容

1. 治療について
- ①当科に最後に受診後、他院で治療（投薬、注射）を受けましたか？
- ア. はい
- イ. いいえ
- ②治療を受けられた方に、
- ア. めまい発作の時のみ受けた
- イ. 一定期間投薬、注射を受けた
2. めまい発作について（めまい発作とは、自分或いは外界が回ったり揺れたりして、就床を要するほどのめまいです。）
- ①当科に最後に受診後、現在までにめまい発作は、
- ア. おきた
- イ. おきていない
- ②めまい発作がおきたと答えた方へ
- ・上記の期間におきためまい発作の回数は何回でしたか
- ・めまいの持続、程度は以前と比べていかがですか
- 持続は 短くなった
- 長くなった
- 変わらない
- 程度は 軽くなった
- 強くなった
- 変わらない
- 御記憶があれば発作のあった年月日を出来るだけ詳しく書いて下さい。
3. 難聴について
- ①最後に当科を受診した頃に比べて
- 患側の耳のきこえが
- ┌ 良くなった
- ├ 悪くなった
- └ 変わらない
- ②健側の耳のきこえが
- ┌ 悪くなった
- └ 変わらない
4. 耳鳴りについて
- ①最後に当科を受診した頃に比べて
- 患側の耳のきこえが
- ┌ 良くなった
- ├ 悪くなった
- └ 変わらない
- ②健側の耳のきこえが
- ┌ 鳴るようになった
- └ 鳴っていない

（平均8年3カ月）である。

治療状況は67例のうち、昭和56年1月から61年12月の期間中に当科で治療を受けなかったのは20例であった。一方、一定期間治療を受けたのは47例で、その治療期間は1カ月から4年2カ月（平均1年1カ月）であった。

この詳細は表2のとおりである。当科で治療を受けず、その後他院でも治療を受けなかった例はわずかに5例のみであった。これら5例のうち、3例は罹病期間は1年未満と短く、また、めまいの程度が中等度と比較的軽かった。メニエール病

の自然経過を検討するためには、全く未治療である5例の経過を検討する必要があるが、症例数が少ないこととこれらの症例のめまいの罹病期間が短く、程度も比較的軽いため、この5症例の経過だけで自然経過とするには問題があると考えられた。当科で治療を受けず、その後他院でめまい発作時のみに治療を受けた7例も自然経過に近い例であると考えられるため、未治療の5例に加えて12例を自然経過群とした。しかし、症例12例でも多くないため、治療を受けたメニエール病群と比較し、両者の相違からメニエール病の経過を検討

表2 治療についてのアンケート結果

当科で未治療で		
・他院でも治療を受けていない	5例	一定期間の治療受けず (自然経過群) 12例
・他院で発作期のみ治療を受けた	7例	
・他院で一定期間治療を受けた	8例	
当科で一定期間治療後		
・他院で一定期間治療を受けた	5例	治療を一定期間受けた (治療群) 55例
・治療を受けていない	42例	

表3 当科への最終受診後のめまい発作反復の有無

自然経過群 12例	当科最終受診後めまい有り 10例 (83.3%)*		発作期のみ治療 7例		
			治療うけず 3例		
	このうち最近2年間に				
	めまい有り 2例 (16.7%)		最近2年間		
	めまいなし 8例 (66.7%)				
			めまい無し 10例 (83.3%)		
	当科最終受診後めまい無し 2例 (16.7%)		治療うけず 2例		
	治療群 55例	当科最終受診後めまい有り 20例 (36.4%)*		他院で発作期, 間歇期に治療 8例	
				治療うけず 12例	
		このうち最近2年間に			
めまい有り 11例 (20.0%)		最近2年間			
めまいなし 9例 (16.4%)					
		めまい無し 44例 (80.0%)			
当科最終受診後めまい無し 35例 (63.6%)		他院で間歇期, に治療 5例			
		治療うけず 30例			

*: $P < 0.01$

することとした。治療群は、当科で治療を受けなかったが、他院で一定期間（2カ月から4年3カ月間）治療を受けた8例、当科で治療を受けその後、他院で一定期間（7カ月から5年間）治療を受けた5例、当科では一定期間（1カ月から4年2カ月間）治療を受けたが、他院では治療を受けていない42例を合せた55例である。

検討事項は、当科への最終受診後のめまい発作の有無、めまいの転帰、めまいの罹病期間、難聴と耳鳴りの経過についてである。

Ⅲ. 結 果

1. 当科への最終受診後のめまい発作の有無に関する調査結果

表3に示したように当科への最終受診後にめまい発作があったと回答したのは、自然経過群は12

例中10例（83.3%）、治療群は55例中20例（36.4%）で治療群は最終受診後にめまい発作があった例が少なく、両群の間に1%の危険率で有意差（ χ^2 検定）があった。AAO-HNSでの治療効果判定期間は2年間が用いられているので、最近2年間のめまい発作の状態を調査したところ、めまい発作があったと回答したのは自然経過群は2例（16.7%）、治療群は11例（20%）であった。最近2年間に限ると両群の差は小さくなり、有意差はなかった。当科で未治療で他院でも治療を受けていない5例のうち3例は当科初診後もめまい発作があったと回答している。

2. めまいの転帰に関する調査結果

めまいの転帰を表4に示した。自然経過群12例中10例（83.3%）は最近2年間にめまいはないと

表4 めまいの転帰

			自然経過群 (12例)		治療群 (55例)		全対象 (67例)	
めまい消失			10例 (83.3%)		44例 (80.0%)		54例 (80.6%)	
めまい 有り	持続	短くなった	0例	2例 (16.7%)	6例 (10.9%)	11例 (20.0%)	6例 (9.0%)	13例 (19.4%)
		変わらない	2 (16.7%)		5 (9.1)		7 (10.4)	
	程度	長くなった	0		0		0	
		軽くなった	1例 (8.3%)		7例 (12.7%)		8例 (11.9%)	
		変わらない	1 (8.3)		4 (7.3)		5 (7.5)	
		重くなった	0		0		0	
めまい治療			8例 (66.7%)		36例 (65.5%)		44例 (65.7%)	

めまい消失：最近2年間にめまい無し

めまい有り：最近2年間にめまい有り

めまい治療：最終めまい発作から現在までの期間が2年以上で、最大発作間隔より長い場合。

表5 めまいの罹病期間

罹病期間

罹病期間	自然経過群 (12例)	治療群 (55例)	全対象 (67例)
1年未満	2例 (16.7%)	8例 (14.5%)	10例 (14.9%)
1年以上3年未満	1 (8.3)	14 (25.5)	15 (22.4)
3年以上5年未満	2 (16.7)	6 (10.9)	8 (11.9)
5年以上10年未満	1 (8.3)	12 (20.0)	13 (19.4)
10年以上	6 (50.0)	15 (27.3)	21 (31.3)
平均罹病期間	9年	7年2ヵ月	7年6ヵ月

当科最終受診から最終めまい発作までの期間

	自然経過群 (12例)	治療群 (55例)	全対象 (67例)
めまいなし	2例 (16.7%)	28例 (50.9%)	30例 (44.8%)
1年未満	3 (25.0)	7 (12.7)	10 (14.9)
1年以上3年未満	3 (25.0)	4 (7.3)	7 (10.4)
3年以上5年未満	2 (16.7)	3 (5.5)	5 (7.5)
5年以上10年未満	2 (16.7)	13 (23.6)	15 (22.4)
10年以上	0	0	0

回答した。めまい発作があった2例では持続時間はともに変わっていない、程度は1例は軽くなった、1例は変わらないと回答している。治療群55例中44例 (80.0%) は最近2年間にめまいはないと回答した。めまい発作があった11例では持続時間は6例が短くなり、5例は変わらなかった。程度は7例は軽くなった、4例は変わらないと回答してい

る。両群合せると最近2年間にめまい発作がないと回答したのは67例中54例 (80.6%) であった。

次に、めまいがない期間の判定を変えてみる。最終めまい発作から平成4年6月現在までの間でめまいのない期間が2年以上で、その期間が最大発作間隔より長い場合をめまいが治療したと判定すると、自然経過群は12例中8例 (66.7%)、治

療群は55例中36例(65.5%)が治癒と判定された。両群での治癒率の差に有意な差を認めなかった。

3. めまいの罹病期間に関する調査結果

罹病期間(初回めまい発作から最終めまい発作までの期間)を自然経過群と治療群で比較した(表5)。自然経過群では罹病期間が10年以上の例が多く50%を占め、治療群では27.3%であった。一方、治療群では3年未満までの例が多く40%を占め、自然経過群では25%であった。平均罹病期間は自然経過群は9年、治療群は7年2カ月で、自然経過群は治療群に比べて罹病期間が1年10カ月長かったが、有意な差は認めなかった。

罹病期間のうち、当科最終受診日から最終めまい発作までの期間を検討すると(表5)、自然経過群ではほぼ均等な分布を示したが、治療群ではめまい発作がなかった例(50.9%)とめまい発作があった期間が5年以上10年未満の例(23.6%)が多く、2峰性の分布を示した。

4. 難聴と耳鳴りに関する調査結果

当科受診後の難聴の自覚については、患側耳では自然経過群、治療群とも10%前後が難聴の自覚が良くなったと回答した。一方、悪化したと回答したのは、両群とも30%前後であった。健側耳では、難聴の自覚が悪化したと回答したのは自然経過群の方が治療群より多いが、全対象では約30%が悪化したと回答し患側耳の結果と差が少なかった。

耳鳴りについては、患側耳の耳鳴りが良くなったと回答したのは自然経過群、治療群合せた全対象で約20%であった。患側耳の耳鳴りが悪化したと回答したのは、全対象では14%であった。健側耳では耳鳴りがするようになったと回答したのは、全対象では25%であった。

IV. 考 察

メニエール病の自然経過を検討した報告は、上村²⁾、吉本³⁾によりされているが、ある期間に受診して治療した患者全例の予後を調査したものである。メニエール病の治療は一般的には発作期以外にも、めまいの反復を抑制するために間歇期にもおこなわれていることが多い。しかし、発作期のみ治療をうけている症例は、間歇期にも治療を受けている例より自然経過例に近い症例と考えられる。今回は、治療をうけていない例と発作期のみ治療をうけ間歇期は治療をうけていない症例を

一緒にして自然経過に近い症例群として、治療をうけた症例群と比較検討し自然経過を観察した。

めまいの転帰については、調査時からさかのぼって最近2年間のめまいの有無を検討した。上村²⁾はめまいが治癒したという条件を最近1年以上めまいがなく、このめまいがない期間が最大発作間隔より長いこととし、初診後平均8.3年のメニエール病のめまいの治癒率は74%であると報告している。しかし、長期的な経過のなかで、めまいが治癒すると判定するには、めまいがない期間が1年では短く、さらに長く設定したほうが良いと思われる。しかし、アンケートで調査する場合にはさかのぼる期間が長ければ長いほど、患者の記憶にもとずくため不正確になる。そこで、このめまいのない期間を2年として検討した。めまいが治癒した条件として、最近2年間めまいがなく、めまいのない期間が最大発作間隔より長いこととした。この条件下では、めまいの治癒率は自然経過群は66.7%、治療群は65.5%、全症例では65.7%であった。最近2年間めまい発作がない割合いや、めまいの治癒率は両群で差が少なかった。その理由を考えるために両群の罹病期間を検討した。治療群では表5に示したように自然経過群より平均罹病期間が1年10カ月短くなっており、この罹病期間のうち当科最終受診以後の経過を検討すると、自然経過群では当科最終受診から最終発作までの期間は均等な分布を示し、当科受診後5年以上めまいが続いた例は16.7%であった。治療群では治療により早期にめまいが消失する例(50.9%)と長期間(5年以上10年未満)続く例(23.6%)に分れた。すなわち治療に抵抗し、長期間めまい発作を反復する難治例が約20パーセントの割合いで存在すると思われる。今回のように初診から平均8年3カ月という長期間経過を検討した場合には、最近2年間だけのめまいの有無やめまいの治癒率には治療の有無が影響しにくいのではないかと考えられた。しかし、治療群では自然経過群より平均罹病期間が1年10カ月短くなっており、治療群で当科最終受診後に短期間でめまいがなくなった例が多いことから、メニエール病の経過は治療により罹病期間が短くなる傾向があると考えられた。

難聴、耳鳴りの転帰については、今回はアンケート調査であるため自覚症状の変化を検討した。

患側耳の難聴については改善は約10%にみられ、悪化は約30%あった。ともに自然経過群、治療群で差はなかった。また、健側耳の悪化は患側耳とほぼ同じ率であった。Friberg⁴⁾らは10年の経過で20数%、20年以上の経過で47%が、Green⁵⁾らは14年の経過で43%が両側メニエール病となったと報告している。今回の症例も両側メニエール病になった症例も含まれていると思われるが、初診から平均8年3カ月経過しているので、加齢の影響も考えられた。

V. まとめ

1. メニエール病の自然経過を検討する目的で、アンケート調査を行った。その後の経過が明らかとなったメニエール病確実例67例を全く治療を受けていない例と発作期のみ治療を受けた例を合わせた例（自然経過群）12例、一定期間治療を受けた例（治療群）55例に分けて比較検討した。

2. 最近2年間めまいがなく、めまいがない期間が最大発作間隔より長い場合をめまいが治癒したとすると、治癒と判定されたのは自然経過群は8例(66.7%)、治療群は36例(65.5%)で、両群の差は少なかった。しかし、自然経過群では治療群より罹病期間が1年10カ月長かった。

本論文の要旨は第70回日耳鼻東海地方部会連合講演会、第51回日本平衡神経科学会にて発表した。

文 献

- 1) 時田 喬, 宮田英雄, 牧 達夫, 他: メニエール病の臨床. 耳鼻臨床 73: 885-897, 1980
- 2) 上村卓也, 金子寿子, 藤多恒子, 他: 初診後平均8年のメニエール病患者の予後. 耳鼻臨床 70: 1691-1696, 1977
- 3) 吉本 裕: めまいの経過, 予後と現況 — 長期的(7~10年)観点からみた —. 耳展 30: 453-458, 1987
- 4) Friberg U, Stahle J, Svedberg A: The natural course of Meniere's disease. Acta Otolaryngol Suppl (Stockh) 406: 72-77, 1984
- 5) Green JD, Blum DJ, Harner SG: Longitudinal followup of patients with Meniere's disease. Otolaryngol Head Neck Surg 104: 783-788, 1991

(原稿到着: 平成5年6月13日
別刷請求先: 水田啓介
〒500 岐阜市司町40
岐阜大学医学部耳鼻咽喉科学教室)